本棚

農林中金総合研究所　編
白石和良・菅沼圭輔・浜口義曠・阮蔚　訳

『杜潤生　中国農村改革論集』

今年は，日中国交正常化30周年にあたり，本書もそれを記念して刊行されたが，私見では，中国の農業・農政に真正面から向き合い，社会主義と歴史・伝統の交叉する十字路で考察と論争を続けた人間の長期の記録という点で，日中両国の識者が，従来より一段と深いところで理解し合う端緒の役を果たすことになると確信している。いくたの壁をクリアしつつ，この歴史的ともいえる作業に汗を流した両国の関係者に心から謝意を表したい。

本書の最大の魅力は，建国直後の土地改革から改革・開放の生産責任制まで，半世紀余の間，一時期を除き，終始，農政立案の現場にあった杜潤生先生が，調査・検討ののち発表した結果を，日本語によって一挙に時系列で見ることができること。翻訳の手際も素晴らしく，これは私の友人の専門家も確認しているが，訳者の四人はそれぞれ中国事情に通じているので，ほとんど翻訳臭が感じられず，杜潤生先生の達意かつ温もりのある透明な文章が邦語で移されている。

盛り込まれた論文は総数64編。「杜潤生文集」（上下，2000年刊）を底本に，ここから約半分を選び，「文集」出版後発表された著作22編から９編を採り，序章，付章のほか，4章に分けて掲載されている。

各ページは，二段組みで，全761ページ。400字詰めで2,000枚近い大冊だが，といって決して取りつき難い本ではない。講演原稿を再整理したものも挟まれていて，知らず読み進んでしまう趣きがある。

もちろん，中国の建国後の動きについての概略のイメージを必要としようが，最後尾の二つの回想録（「毛沢東」と，土地改革の上司，鄧子恢について）などは，「中国」に対する素朴な関心だけという場合でも，素晴らしい文章として面白く読める。

ガイドがほしいという向きには，訳者の一人の白石和良さんが，巻頭に熱のこもった「解題」を書いている。14ページに及ぶ入念な文章で，ある種，中国における「国のかたち」のでき方を思わせるものがある。その他，もう一人の訳者の菅沼圭輔さんが，これもキメの細かい「用語解説」を提供してくれている。

原著者の杜潤生先生は，「解題」にあるように，今日では，「中国農政の父」とまで称されているほどの方だが，改革・開放路線で，農政立案のフロントに復帰するまではたいへん苦難な道を歩かされた。1913年，山西省出身で，建国前から旧解放区で土地改革に従事，建国後の路線闘争では，経験を生かした，段階的推進論が毛主席の賞賛を受け，中共中央に新設の農村工作部に登用されたほどだが，その後，路線闘争の風向きが急激に変わり，1955年一回目の失脚。

しばらくして，中国科学院に移り草創期の立ち上げで才腕を発揮したが，1960年代央，こんどは文化大革命で，極左派の追い落としに会って二回目の失脚。1978年末の三

中全会で鄧小平派が復活，改革・開放路線の上で，新設の国家農業委員会の副主任，その後，82年，これも新設の国務院農村発展研究中心の主任（国家農業委は廃止）となり，社会主義の中の土地公有制という土壌に，小農経営たる家族経営を植え付けるという離れ技的な大事業を立派に成功させ，農民に満足感を与えて安定させ，食糧の大増産をも実現し，むしろ欧米社会で広く知られる，重鎮的な存在となった。

1992年，鄧小平の「南方講和」あたりを契機に再び，執筆，講演活動を活発化させ，論理的な鋭さとユーモア感覚を合わせもつ，いえば素晴らしく切れのいい人柄が，卒寿を感じさせない人気を醸している。

第Ⅰ章は，「農業生産請負制の展開」（1980～84年）という表題通り，ポスト文革の象徴的な政策である「生産責任制」の制度的な定着に向けての地方幹部や解放軍その他への講演記録が中心。

論文㊷の「土地制度」の講演草稿（1998年）の中では，その生産責任制でさえ，生みの苦しみを味わい，当の三中全会の，農業問題の決議作成の際も，最初は，まだ人民公社派が強く，「包産到戸（家族請負制）は『不許』（許さない）」だったのを巻き返して，「『不要』（してはならない）」になったのだという。こういう肉声のエピソードを読めるのも，本書の面白さのひとつである。

第Ⅱ章の「農村のマクロ経済改革」（1985～89年）は，生産責任制というミクロの改革がほぼ行き渡り，食糧過剰対策など市場全体に目くばりをしていく時期で，当時，華々しく論じられた，「外向型発展戦略」（1987年）も主テーマとして登場するが，他方，物価上昇が激化した89年の論文㉝では，「負の現象」というラジカルな表現で，第一にインフレ，第二に腐敗現象，第三に分配の不公平の３点を指摘し，改革・開放が重要な屈折点を迎えていることを警告している。

そして，この時期から90年代にかけて，杜潤生先生の論文には，新しいキーワードとして，「民主化」「基層民主」「人民民主」など，とにかく「民主」という言葉と，財産権問題の頻出度が高まるようになる。

第Ⅲ章の「市場経済の激浪の中で」（1992～95年）の14編のうち，最初の論文以外は「南方講和」以降。第Ⅳ章の『新たな発展をめざして』（1996～2001年）も，14編のうち９編までは，前記の「文集」以外のもの。最新の論文は2001年８月の，国土経済学研究会での，「農村発展の新たなチャンス」で，結論部分では農民の組織化，民主制度の推進，人材育成などを強調している。

読み終えての私の印象は，とにかく舌を巻くほかはないエネルギーの大きさであり，「あるべき社会主義像」の軌道を一歩でも進めるために，現実の中で，調査し，考え，方向づけに精を出す，知的探究の修道者というか，「知恵」の巨人という姿である。「われわれが農業問題を研究しているのは，中華民族の生存問題を研究しているのである」（論文㉞）との一節にも，重圧をはねのけつつ，出路を探る魅力を感じさせる。

――（社）農山漁村文化協会　2002年３月
12,000円（税込）　761頁――

（内外食料経済研究会
代表　山地　進・やまじすすむ**）**